

の中には世間に傍證の出でぬ爲め、参照に由なきものもある。それであるから縦し年月事實に多少の感違ひ覺え違ひはあらうとも、時代の概念を享

け、氣分を味ひ、思想を酌み分くる上に於て本書は尙ほ其價値を失はぬのである。

ローマンチック時代に於ける一青年史家の生立 (上)

文學博士 坂 口 昂

Der Mensch ist wie ein Jamm, der seine Kraft nicht so sehr aus dem Boden zieht, als sie von Luft und Licht, Wind und Wetter, den Stimmen selbst empfängt.—Ranke am 90. Geburtstag, 1883.

目 次

- 一、本講演の動機及び史料
- 二、ナポレオン時代、幼少期
- 三、ローマンチック環境
- 四、ランケのローマンチック前期
學生及び教師
- 五、ランケのローマンチック中期
伯林の青年教授
- 六、ランケのローマンチック後期

南方研究旅行

七、結論 かく生ひ立つた歴史家

諸君！今日この題の下に御話致しますのは、歴史家レオポールド・フォン・ランケのことに關してであります。

一、本講演の動機及び史料

時は一八七五年、ランケ齡既に八十歳、彼の長き生涯を回顧し、『何たる大變遷、何たる大事件に満ちたる時期よ』と叫び、徐ろにその間の史學發展の由來を指摘した。その内に史學史上吾人の傾

聽に價する言葉がある、曰く、『歴史研究はナポレオン思想イデオロギの天下獨裁に對する反抗に於て固有に發生した。ニーブールの羅馬史が學界の内に外に及

を取らうとした、この研究たる、やがて余をして先づヴィーン次にイタリヤ旅行に上らしめたるものである』と物語つて居る。

ぼした偉大なる影響は、この反抗を基礎として居る。當時、一個の統一的支配に對立しては特殊の生活、一個の廣大なる國家發展のうちには諸種の内部の事情といふものがあつて、これらの對抗に準じて、學者の著書に於てすら到るところ熱烈なる競争心を喚起した。』(中略)老歴史家は更に語をつぎ、當時『晦澁難解なる學問も、多かれ少かれ一個の政治的色彩を帯びて居た。この對抗の紛争は、哲學及び神學に依つて何等か平げられたかといふにさうでない、却て一層ふかく刺撃された。見わたす限りあらゆる方向に於ても活潑な運動が高まつた。この真中に、余は伯林に於て、一青年教授として生活し、近代史研究に着手して、余が當時なほ之に於て缺けて居ると思つた科學的傾向

この引用の言葉のうちに、本講演の動機が伏在して居る。御承知の通り、今より百年前、十九世紀の上三分の一期は文化史上所謂ローマンチック時代である。而してこの思潮は當時の政治上大變動、即ち佛蘭西大革命及びナポレオンの支配に刺撃されて大成した。本講演の主人公ランケは、彼自らの非凡なる天分を以てしても、なほこの當時曠古未曾有の雰圍氣のうちで始めて生ひ立つた。これを今日流行の標語を用ひていはゞ世界改造運動が當時にもあつて、その渦中から捲き起されて來た青年史家の一人が即ちランケであつた。加ふるに、彼の故郷、彼の學びたる學校、彼の教えたる大學、彼の旅行地につきては、その最も多くはその天然、その生活と共に、私の曾て親しく體驗

した所であることも、亦た私をして一層本題目に興味を感せしめて、今日こゝに御清聴を煩はすことになつた所以である。

然らば本講演の根本史料は何かといふことは、極めて重大なる問題である。

第一、ランケの『レイベンズグゼヒテ生涯史』と總稱せられるもの、

これは、ランケ全集五十四卷（一八六七—一八九〇豫約出版）の最終卷、第五十三—四卷合冊一本となつて居る。内容は、思出、書簡抄、日録、及び雜の四部から成つて居る。その内、最も本講演に大切なるは思出と書簡抄とである。思出は一八六三年、一八六九年、前記の一八七五年及び一八八五年のそれらから成る。書簡抄は一八一九年オーデル河上のフランクフルト中學教師時代以後のもので、三百二十九通から成つて居る。尙ほ、未刊の書簡四十通がランケの子フリドゥッヘルムによつて一九〇四年一月以後のドイッチェ・レヴィユ

に公けにされて居る、その外に、フアルンハーゲンとの往復書簡がある、下記参考書を見よ。

第二、ランケの青年期の著作である。その主要なるものは一八二四年の『ローマ風ゲルマニ風諸民族の歴史』、一八二七年の『南歐の諸君主及び民族、その一、オスマニ及びイスパニヤ王國』、一八二八年の『セルヴィヤ革命』等である。

第三、近親の人々のランケに關する思出等の類。就中、ランケのすぐ次の弟ハインリヒの思出（一八七七年ストットガルト出版）、その次の弟フェルチナンドのブフォルタ學院の思出（一八一四—一八二二年、一八七四年出版）ランケの子フリドゥッヘルムの思出（一九〇四年）。その内、『ブフォルタ學院の思出』の外はいづれも接手しないが、他の引用して居る参考書に據る。

その外に、ランケの青年期に交際又は接觸した人物の書簡や著述は、本題目をコントロールする

に必要であるけれども、私はそれらの原書に接し得ないのを遺憾とする。例へばフアレンハーゲン夫妻の日記書簡の類、ランケの青年教授期に於ける學問上反對者たる歴史家ハインリッヒ・ハエの書いたもの等である。是等もまた他の參考書によつて窺ふの外はない。

以下、會て伯林大學及びその王立圖書館に於てまた今當地に於て、私の自由となりたる史料及び若干の一般參考書を列記しておく。

- Acton, German schools of history: Engl. Hist. Review I, 1886 (German author. transl. by J. Imelmann: Die neuere deutsche Geschichtswissenschaft. Berl. 1887.)
- Dove, A. Leopold von Ranke: Allgemeine Deutsche Biographie Bd. 27. (Dove, Ausgewählte Schriften).
- Harnack, A. Geschichte der Königl. Preussische Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berl.

- 1901.
- Lenz, M. Bismarck und Ranke, 1901 (Ausgewählte Vorträge u. Aufsätze, Berl. 1905).
- Nalbandian, Rankes Bildungsjahre und Geschichtsauffassung. Lpz. 1901
- Wiedemann, Th. Briefe Leopold von Ranke's an Van hagen von Ense und Rahel aus der Zeit seines Aufenthaltes in Italien. Zur Säcularfeier von R.'s Geburt mitgeteilt. Jetzt in der K. Bibl. zu Berlin!
- Ranke und Bettina von Arnim: Deutsche Revue 1895 Apr.
- Ranke und Varnhagen von Ense: D. R. 1895 Aug. u. Sept.
- Ranke und Varnhagen von Ense vor Rankes italien. Reise: D. R. 1896. Aug.
- Ranke und Varnhagen von Ense nach der Heimkehr aus Italien: D. R. 1901 Aug. u. Sept.
- Diether, O. Leopold von Ranke als Politiker. Lpz. 1911.

Lorch, O. Leopold von Ranke. Berl. 1891.

Lindner, Th. Rede bei der Weihe des Ranke in Wiehe errichteten Denkmals. Am 27 Mai 1896 gehalten: Allgemeine Zeitung.

—Die Weihe des Ranke-Museums in Wiehe, Rede, am 27. Mai 1907 gehalten: Allgem. Zeitung—
Auch in: Jahresbericht über das 2. Geschäfts-jahr des Ranke-Vereins in Wiehe 1907, Wiehe 1908.

Helmolt, H. Ranke Bibliographie. Lpz. 1910.

Gülland, A. Modern Germany and her Historians (Engl. translation. London 1915): I. von Ranke p. 68-119.

二 ナポレオン時代 幼少期

ランケの生れたのは、一七九五年十二月下旬、ザクセン選挙公領内、チューリングン山中、ウンストルート河畔の平和なる田舎の市ヴィーエである。

この年は佛國大革命の狂瀾怒濤が、國內に收つて外國に及ぶ時である。少しく詳はしきいへば、内では恐赫政治始めて平ぎ、國民協議會は總務政治の憲法を作り、偶稀代の英雄ナポレオンを備うて亂民を砲撃鎮壓し、宛ら新憲法の血祭をした。即ち天下一統の支配者たるべきナポレオン出世の初舞臺が開かれた。外ではバーゼル講和成立し、プロシヤは佛共和國と和し、歐洲の戦局から脱退して、北方獨逸諸國と共に局外中立についた。即ちプロシヤの中立十年間、随つて北獨に於ける實業その他平和生活の繁昌、就中、文藝ではゲーテシルラのワイマールに於ける提携の時代が始つた。

されば、ランケが十回の誕辰を了へて間もなく恰もプロシヤが再び劔を抜いて起つて居る。それから、この故フレデリク大王の軍國がイエーナ、アウエルスタットの戦で忽ち脆く土崩瓦解し、そ

の結果、ナポレオンはロシアと結びて天下統一の實現を企てたが、幾ばくもなく反動起つて、諸國民の自由戦役まで、數年間自ら維持するといふ時代となる。隨て、ランケの少年及びそれから青年への過渡時期は、恰も佛國大革命の連續たるナポレオンの出世及びその支配、即ち文化史上ローマンチック發生時代に相當して居る。この世界的時代と、彼は如何なる交渉を有つて居るか本講の主要問題である。

彼の最初の環境は頗る限局されて居た。彼の祖先及び一族關係は、ゾイーエを中心とした約十里乃至十二里ばかりを半徑とする圈内にあつた。但し、この圈内には文化史上可なり重要な場所が含まれて居る。例へばエルフルトも、ワイマールも、イエーナも、ナウムブルグも、ハルレも、またルテルの故郷マンسفエルドやアイスレーベンも、尙ほ又た獨逸中古史の傳説に富んだ幾多の

舊蹟、例へばキフホイザの巖窟やゴールドチ・アウエの沃野も、將たまた有名なるハルツ山の一部もいづれもそれである。有名なるライプチヒやウイッテンベルグ、はたワルトブルグのあるアイゼナハはみな圏外にあるけれども、さほど遠く離れては居ない。而して彼自身の少年時代の行動は、以上指摘した場所には概してまだ直接には觸れて居ないと思はれる位に限られて居た。

彼の家はチューリングゲン固有の信仰たる新敎の信者で、その社會上位置は第三級に屬す。彼の祖先並に親類のうちに牧師や狀師があつた。彼の父はライプチヒ大學出身の狀師で、ゾイーエの裁判所に勤め、尙ほ一個の騎士リッスゲイトの采領をも所有經營して居る。市にはザクゼンの軍隊が駐屯して居る。要するに、彼の家は、チューリングゲンの片田舎、百姓の人口が卓越し、而も牧師も將校も法律家も醫師も住居して、それらの知識階級が多少なり

とも代表されて居る極めて平和な小都會に於て、その中産的知識階級に屬して居るといへる。

彼は十一歳の時、アウエルスタットの砲戰の地響を、故郷の附近の小山に登つて、聞ゆるともいひ聞えないともいふ程度で、かすかに聞いたと覺えて居る。ついでプロシヤ軍の敗走、佛兵の追撃となり、それ／＼の軍人が順次に市に入つて來た。それで佛兵の來た時市の校長は、市で唯だひとり僅か佛語の出來る青年——それは牧師の聲でこの際佛人の通辯をつとめた男——から俄かにこの外國語の稽古を始めなければならなかつた。その後、レオポールドは市から一里あまりのドンドルフ修道院學校カローリネンシューレに送られた。彼はこゝに二年間居る間に、ナポレオンのイスパニヤから獨逸に向つて發した宣言をライプチヒの新聞で面白く讀んだ。それから一八〇九年の五月、シユールブフォルトに入る事が出來た。

抑もこれはヴィーエから六七里ばかり、本とはこれも修道院であつたのが、かの教會改革の際に改造されて出來た三個のザクゼンのフェルステンシユール君主學校の一、而もその最も有名なものである。場所は實に靜かなザールの谿間にあつて學校だけで獨立自營する理想的別天地を作り、古典中學の模範となつて居る。こゝから幾多の名士が輩出した。只だその二三を指摘すると、十八世紀の有名な獨逸的詩人クロップストックがある。哲學者フイヒテも亦たこゝの出身だ。是等はランケの先輩である。序に、後の出身者をあげると、近くでは哲學者ニーチエも、歴史家ランプレヒトもそれだ。

かくの如き學院で一八一四年の春まで五年（六年の代りに）在學し、ランケは具さに古典教育を受けて彼の將來大成の基礎たる文獻的素養をがち得た。この間の趣味深き思出は彼の物語に出て居

る。またこの學院そのものゝ事は彼の次のく弟フェルデナンドの『一八一四—二一年間シュールプフォルタの思出』を参考すべきである。因にいふランケは男では同胞五人の最長兄で、五人ながらすべて相ついでこの同じ中學に入つて、當時ザクゼンの有名なる學校改良家ラインハルトの所謂『ヘリコン』（學校のある山クナーベンベルグを稱して）に遊ぶミッターゼの兒等となつたのである（一）

只だ一つ問題とすべきことがある。それは政治上から、文化史上からいつても、この驚天動地の危機に於て、如何に籠城主義のプフォルタ學院のうちでも、その在學生が何等の微動をも感ぜずに居られたらうか、といふ點である。

抑も當時のランケの環境は、上述の如き家族並に學校關係から推察される通り、チューリンゲン山中の田舎の宛然中古的生活状態であつたといへる。只だ十八世紀の啓蒙の風潮が時勢なみに多少

こゝにも浸潤して居たばかりである。例へば、最近勃興の獨逸文學思潮については、クロップブストックは學院の先輩で、學院の内にその記念の泉も残り、既に大名を戒して生徒から尊ばれて居る。フィヒテは同じ學院出身の先輩であるけれども、まだランケの在學中に關する思出には現はれて居ない。次に出身者ではないが、ゲーテとシルラは流石に生徒等のあこがれの中に入つて來た。しかし、ランケの物語によれば、これらの現代文學は只だ雲烟過眼に流行したばかりで、眞面目の研究といへば、全然古代世界のみに向けられて居る。而して現代の英雄ナポレオンその人物につきては少青年間の人氣頗る高かつたとある。この際、地方の領主ザクゼンの君が、既に王號を許されてライン同盟に加入し、フランス人の帝國の用を勤めて居ることは、われ／＼の記憶しおくべきことである。既にしてナポレオンのロシヤ征伐の大軍が

續々前進した。學院の周壁は國道に沿ふて居るから、佛蘭西の聯隊の通過があり／＼と見られた。明くれば一八一三年の春、武運は既に逆轉した。聯合軍は始めてザクゼンに打ち入つた。若きランケ等は始めてコザツクの姿を目撃した。やがてその夏、佛蘭西皇帝新募の大兵を提げて再び現はれたから、學院の前面に程近きケーゼンの高臺を人波の打ち寄せてゆくのが望まれた。即ちリュッツエンの戦となるべきであつた。聯合軍はやがて退却した。この變化に富める活劇の大語は、秋高く馬肥ゆる十月、ライプチヒに於ける『諸國民の大會戰』となるべきであつた。かくの如く眼前を往來する廣大なる對抗運動に對して、生徒等の心もちは如何であつたか。最初の間はナポレオン及びその諸將軍の名聲赫々として學院を壓し、若殿ばら『ヘリコンの山』に於ける苟且のケーグル遊びにも、彼等はてんでに將軍等の名乗を揚げた位であ

つた。しかし、時と共に人氣は次第に移つた。聯合軍の自由獨立の宣言が彼等の間に歡び聽かれるやうになつた。ランケはこの際恰もタシツスの古典を讀み、特にかのブリタニヤ征伐の羅馬將軍アグリコラ傳を研究して居つたから、眼前の龍架虎攫のさまを垣間見では、ゆくりなくブリタニヤの女傑ポアチシア對羅馬人の抗爭が彼の腦裡に浮み之を擔任の教師に話して、この同一視の妥當なることを確認されたといつて居る。この邊に未來の歴史家の面影が窺はれる。

かくの如く浮世の荒波は遂に修道學院の周壁にも推し寄せたから、若きランケ等もその強大なる波動を感せずには居れなかつたのである。それは確かなる現實であつた。されども彼の思出を借りていへば、『しかし我等の間には、プロシヤ青年の大衆を動かしたかの強烈な戰爭熱に羅るものは尠かつた。只だ單個の者がこれに感じて學院を罷

り出たばかりだ。私自身はこれを思ひ能ふには餘

りに弱かつた。凡そ一個の大國家が倒れたが故に
全力をつくして之を恢復しなければならぬとい

ふ、この熱情から迸り出る特殊の衝動は、我等の
學院の壁内には少しも流れ込むに至らなかつた。』
これが老ランケの告白である。所詮この微溫的態

度はザクゼン君主學校の一般風潮であつて、單に
ランケ一人に限らなかつたであらう。けれども、

この際、吾人は次の二つの事項を注意するがよか
らう。第一ランケの天性が穩健に作られて居たこ

と、第二、當時十八歳の青年にして中學上級生で
ありながら、如上のシュール・プフォルタ特有の穩

健な學風によつて彼の天性が益保護されたことで
ある。若しランケが最初からプロシヤ領の住人で

ドレスラウカ、伯林か、若くばハルレカの或る中
學に在學して居つたならば、彼の性行が斯くの如

き中學を實際風靡した大勢によつて何等かの異常

なる影響を受けずに居られなかつたであらう。

ランケは幼少の時身體虛弱で、十三歳ごろまで
大病に罹りやすく、とかく成長を危ぶまれた。さ

れど平生自然をよろこびて散歩し、遺跡をなつか
しみて遠足し、質實な生活と規則正しい働作とで
その後は次第に病抜けして、すつかり健康となつ

た。それで身體は小作りで、活潑に、しかし時々
いそ／＼した身振りして、朗らかな音聲と、敏速

い話し方で、見るから全然活き／＼して居る。頭
は鈞合はづれて大きく、額秀で、毛は豊かに黒味で

眼は輝き、如何にも内的生活の充實、清新、深奥
さを窺はしめる。この精神の發展は頗る早く且つ

確かであつた。遊戲は敢て避けなかつたけれども
どちらかといふと、ひとりで考へ込むといふ風が

目立つた。彼の知識慾は生れがならにして盛んに
何等の刺撃を要しなかつた、さうしてその進歩極

めて顯著であつた(二)。實に彼の標語は『勤勞それ

自らが樂み』『Labor ipse voluptas, であるので
ある。

(1) Ferdinand Ranke, *Rück Erinnerungen an*

Schnapferte Halle, 1874. S. 3. 9. 186.

(11) Love, Leopold von Ranke (*Ausgewählte
Schriften* s. 150. un 1 Die Allgem. Deutsche
Biographie, Bd. 27.)

獨逸領土變動の意義

文學博士 石橋 五郎

千九百十九年六月二十八日、ヴェルサイユ宮殿
に於て結ばれたる講和條約に依りて、獨逸は其本
國に於て約三萬八千方哩の版圖と、其全殖民地一
百萬方哩を失ひ、獨逸領土は將に大なる變動を來
さんとしてゐる。

聯合國が割讓によりて、獨逸に領土の變更をな
さしめし原因は、獨逸の敗戦によること勿論なる
が、其變動を受けたる個々の地方に就て見れば、
各其理由、意義を異にするものがある。而してこ

れらの意義理由等は、或意味に於て一般領土に對
する現代思想を反映するものと見らるゝから、予
は茲に此等に就て、少しく考ふる所を述べんと思
ふ。

聯合國が獨逸に與へたる條約文の第三章『獨逸
に於ける政治的條項』中には、割讓による獨逸領
土の變動に就きての政治的關係を説いてあるが、
其中には其割讓等による領土變化の理由を、稀に
は指摘してゐる所もある。例令ばザール河流域及
ビアルサスローレンの割讓に關する記述の如きは